

1995-15

橋爪大三郎
〔社会学者〕



密教集団と陰謀

オウムは仏教の正統な出家集団なのか？
その組織は共産党などの革命集団とどう違うのか？
オウム教団の教義と組織に則して「陰謀と犯罪への道程」を考へよう。

出家主義の仏教教団であるはずのオウム真理教が、地下鉄サリン事件をはじめとする一連の疑惑の渦中にある。真相はいずれ裁判のなかで明らかになるとしても、果たして仏教徒である彼らに、そうした事件をひき起こさなければならぬどのような動機や必然性があつたのだろうか？

このうち、動機の面については、別に考察した(オウム真理教はなぜ、最終戦争を覚悟したか)『月刊RONZA』六月号)。本稿は、教団の組織原則に照らして、一連の疑惑が彼らによって必然的にひき起こされたと言えるかどうかを考えてみよう。

現れるべくして
現れた教団

オウム真理教の出発点は、麻原彰晃氏が「日本で唯一の最終解脱者」としてヒマラヤから帰国し、彼の修行法に従うならば誰でもすみやかに解脱できる(超能力もえられる)と言ったことだった。

このことは、二つの意味をもっている。ひとつはこの宣言が、既存の仏教界に対する痛烈な批判になつてしたこと。既成の仏教は、

平成5年10月13日発行(1993年10月13日発行) 宝島社発行
A3 628号A827号

別冊宝島
8
島特別編集

宝島

30



特集
僕たちの好きな戦争
論者 宇野浩二
作家 谷田の戦争

疑惑の北朝鮮「付属」大学

本日も無風なり
十三年度の戸塚コトスケール体験記!

【特集】
オウム真理教の誘惑!

元オウム信者の告白!

自衛隊レンジャー部隊出身



元オウム信者の告白!

仏教徒の本来の務めである修行(それも、解脱をめざす真剣な修行)をそっちのけにし、人びとの悩みにも、時代の課題にも、教理の研鑽にも背を向け続けてきた。もうひとつは、八〇年代に入ってオカルトや超能力や神秘思想などをこたまぜにしたサブカルチャーに魅きつけられた無数の若者の、渴望にも似た感覚にこたえるものであったこと。――この二つの意味で、オウム真理教は日本に現れるべくして現れた教団だったのであり、だからこそその後順調な拡大をとげたのだった。

しかし、麻原彰晃氏が導師(グル)として、教団の頂点に立ったことは、この教団が仏教教団としてどこまで正統なのかについて、議論の余地を生じさせた。

仏教徒であるかどうかの分岐点は、三帰依(仏・法・僧の三宝への帰依)を唱えることである。このうち、仏陀への帰依は、釈尊への帰依を意味する。そして、法への帰依は、具体的には、釈尊の説いた経典の権威を承認することを意味する。さらに、僧(サンガ)への帰依とは、釈尊が創設したサンガを尊敬し、その修行法(戒本^{じへいほん}、波羅提木叉^{はらだいまさ})の定める戒を尊重することを意味する。正統な仏教の修行者とは、このこと(釈尊の覚り^{さつじん}、麻原氏の覚り)はいかに証明されるのか? 同じく出家者らの説明によると、麻原氏はインドの高位の聖者らに会い、自分の宗教体験について述べたところ、彼らは、それは仏教経典という仏陀の覚りそのものであると判定したという。これでは証明になっていない(Qなぜか? 論証は読者にまかせ)が、先に進もう。

出家修行と戒

つぎに重要なポイントは、麻原氏を師と仰ぐ出家修行者の集団は、どのような戒に従っているのかということだ。

出家者の修行は一般に、戒(修行のための原則)にきわめて忠実である。なぜならば、戒は、煩惱を滅尽し解脱へと向かうための行為のガイドラインとなるからだ。その点は、オウム真理教の場合も同じだ。したがって、オウム真理教団の戒がどのようなものか分れば、彼らの行動をかなり正確に理解し、予測できると期待できる。

仏教の出家集団(サンガ)の場合、戒が決定的に重要である。

行者は、初期の仏弟子たちから途切れることなく受け継がれた戒を授けられなければならない(戒は学位のようなもので、自分で自分に授けることができないのだ)。正式な授戒の手続きを経ることが、仏教徒であるための必要十分条件なのである。大乘仏教の成立以降に東伝して、中国や日本に展開した仏教は、この点(戒の正統性)で疑問の余地こそあったが、この原則に正面から異が唱えられたことはいっつもなかった。

オウム真理教の教えは、仏教の経典(特に、阿含宗と同じく、南伝パーリ語の経典)に依拠する。その意味で、仏教思想にもとづく教団ではある。しかし、彼ら出家修行者の集団が、仏教の伝統的な組織原則から考えて、正統なサンガであるとは考えられない。以下それを検証していこう。

釈尊か、導師か

すべての仏教経典は、釈尊がこううえなく高い解脱(無上正等覺)をえたことを前提として書かれている。この点をゆるがせるなら、そもそも仏教が成立しなくなる。

仏教徒は、在家/出家に大別できる。在家者には、五戒(殺生戒、偷盜戒、邪淫戒、妄語戒、飲酒戒)が授けられる。これらは、日常生活を送るための指針で、違反したからといって罰則があるわけではないが、なるべくそれに従って行動すべきであるとされる。いっぽう出家者(サンガの比丘)には、具足戒が授けられる。戒の条項はきわめて数が多く、具体的で、比丘は二百五十戒、比丘尼は三百四十八戒にもぼる。釈尊を師として出家修行をするとは、要するにこれらの戒を守った修行スタイルをとることなのである。

戒を授けると、修行者には戒体目に見えないパワー^{パワー}がそなわって、修行がはかどると考えられている。具足戒やサンガの運営方法は、仏典のなかの律蔵に収められている。これらの規則は釈尊がじきじきに制定したもので、弟子たちは勝手に変更できない。大乘教団はこうした修行法を「小乗」とあざけて、戒律を守ることをやめてしまったが、南伝したスリランカやタイの仏教は、今日でもこの戒を厳格に守っている。

仏教の組織原則であるサンガの運営方法は、

それでは、麻原彰晃氏の到達したとされる最終解脱と、釈尊の解脱とはどのような関係になっているのだろうか。

釈尊の解脱(麻原氏の解脱なら、麻原氏を導師(グル)と仰ぐ理由を、説明しなければならなくなる。仏教の原則から言って、釈尊の修行法よりも麻原氏の修行法を重視するいわれはないからだ。いっぽう、麻原氏の解脱(釈尊の解脱なら、オウム教団が仏教を名のる理由がわからなくなる。釈尊の権威や仏教経典を借りずとも、麻原氏の権威に従えばよいはずだからだ。どちらにしても、矛盾が生ずる。

それからあらぬか、青山の教団東京総本部で私が取材したオウムの出家者らは、麻原氏の至った解脱の境地は釈尊と同等のものだと答えた。論理的に考えて、それ以外にはない。ただし、グル(師)なしでその境地に至ったという点では、釈尊の方が麻原氏より一段階上であるという。

修業上の指導者を仏陀と同等のものとして帰依するのは、やはり出家修行者であった日蓮を仏陀とおおぐ日蓮正宗とよく似た構造になっている。

仏教の精神を理解するために重要なのに、わが国ではほとんど知られていない。もう少し詳しくみてみよう。

出家した比丘たちは、まったく対等かつ自由な修行者で、ふだんは自由に遊行しつつ乞食生活を送っている。彼らのあいだにはいかなる固定した上下関係も、常設機関もない。彼らを縛るものといえば、釈尊の定めた戒律のみ。サンガは自治体で、エリアごとに定期的に全体集会(羯磨)を開く。そして、全員一致でものごとを決める。すべては自発的に行なわれ、一切の強制や命令はない。なぜなら、仏教の修行は自発的でなければ意味がなく、他から強制された行為はなんの功德にもならないからである。

サンガの戒律違反にも、この原則はあてはまる。戒に違反した比丘は、集会の場で自発的にその事実を申し出、定められたやり方に従って自分で自分を罰する。ほかの比丘はそれに立ち会うにすぎない。もつとも重い罪でも、サンガを追放になるだけであって、それ以上の刑罰を課せられるわけではない。

いっぽう大乘教は、もともと在家者の運動として出発したが、時代が下るにしたがって



オウムの戒律違反管理は仏教とは正反対である

反社会的自転車操業

それでは、オウム教団の出家者とは、いったい何なのか?

オウムの出家者は、①家族と連絡を断つ、②財産をすべて教団に贈与(布施)する、ことになっている。この点をめぐって、多くのトラブルが発生した。

①は、キリストの教え「息子を父に、娘を母に、嫁をしゅうとめに、反抗させるために

小乗のサンガと混在し、大小兼学がふつうのかたちになった。
中国に伝わったのは、比較的初期の大乗教だったが、それでも出家を原則とした。では彼らは、どんな戒に従うのか。大乗戒に従うと主張するのだが、それは名ばかり。そもそも大乗には、独立した律蔵(戒本)がない。大乗戒は大乗経典のなかに書いてあることになつているが、もちろんはつきりしたことはなにも書いてない。そこで実際問題として、大乗の出家者も、戒律の点では小乗の具足戒を基準にせざるをえない。

わが国の仏教は、戒律を守るといふ点ではまことにいい加減だったが、律蔵の定めによるサンガ運営の方法そのものはある程度取り入れられていた。中世の寺院では、戒に違反した事実を自己申告するやり方なども、取り入れられていた。その原則は、密教の寺院でも変わらない。

オウムは仏教教団か?

オウム真理教は、どこまで仏教教団なのだろうか?

オウム真理教の場合、修行は、小乗(ニカールヤーナ)→大乗(マハーヤーナ)→金剛乘(ヴァジラヤーナ)の順に進んでいくことになつている。それなら、戒律もそれに対応して、小乗戒→大乗戒→金剛乘戒を用意しているのだろうか?

私はオウム教団の戒本を入手したいと思つたが、東京総本部で外報の担当者に尋ねたところ、そんなものはないと言われた。戒は戒本として成文化されて(印刷されて)おらず、出家修行者に対して、内部通達として伝達されているらしい。具体的には心・口・意の十戒をベースに、それを具体例にあてはめたまざまな戒がある。成文化されていなくても、各支部の古参リーダーが今までの通達や具体例をおぼえていて、それを新人に伝えているので問題がない、という話だった。戒律違反を処理するための、出家者の集会(小乗戒にいう羯磨)のようなものも、定期的に開かれていくわけではないようだ。

このことは、重要な問題を含んでいる。このシステムでは修行者は、自分が戒律に違反したかどうかを、上位の修行者に教えてもらうまで知ることができない。また、戒律違反

が生じた場合にどう解決すればいいかも、上部の指示を仰ぐことになる。これを極端に押し進めれば、上位の修行者は任意に自分が管轄する修行者の「戒律違反」を発見でき、懲罰を命ずるといふやり方になつても不思議はない(捜査当局は、数十人の「反抗的な」信者が戒律違反を理由に、教団幹部の懲罰を受けたとみている)。自分の修行を自分でコントロールし、戒律違反を自分の手で解決するという仏教の出家修行の原則とは、正反対である。

オウム教団の戒律は、麻原氏が古参リーダーを指導し、古参リーダーが各支部の修行者を指導するという上意下達のやり方で、教団のピラミッド組織を通じて出家者全体に供給されている、と考えられる。それは戒律と言うよりも、教団組織の規律(もつと言え、麻原氏の命令)と変わらない。教団組織にプレスになることが戒律であり、それを実行することが修行であるという具合に、出家修行のあり方がどこまでも教団の組織目的に吸い寄せられていく構造がある。オウム教団の場合、戒が明確でないという点において、出家者の行動が自律的でありえないのだ。

私は来た」を連想させるし、②は、仏教の布施のことではないかという感じがする。そこで何となく、宗教一般にありがちな社会との摩擦と思われがちだが、よく考えてみると、そこには見過ごすことのできない反社会性が隠れている。

布施について考えてみると、出家集団に対する布施(財物の贈与)は本来、在家信者の行為である。在家信者が自発的に布施するからこそ、彼の功德になる。オウムの場合、出家しようとする信者が、彼個人の財産を半ば強制的に教団に布施させられるというのだから、仏教の原則を逸脱している。仏教の出家者もたしかに、わずかな什器と衣服を除いて財産を持たないのであるが、それはもとの財産を一家に置いてくるからだ。そうしないと残された家族が生活に困ることになる。仏教は、在家者の家族を重視するし、キリスト教にはそもそも出家の考え方がないから、家族と連絡を断つというやり方も、正統宗教から大きくずれている。

戒律を持たないオウムは、出家を、①、②のように特徴づけた。ということは、オウム教団は、在家(世俗社会)と円満な関係を築

くことを初めから断念している、という意味になる。仏教の出家集団(サンガ)は、日々の食事を在家の人びとにあおぐことから明らかのように、在家との円満な互恵関係出家は在家に戒を授け説法をし、在家は出家に日々の布施をする)に支えられている。それを否定するのが、出家主義のオウム教団の独特な点である。出家に際して財産一切を教団に寄贈させ、親兄弟の財産もねらうとなれば、人びとが警戒心をもつのは当然だ。オウム教団の出家は、いわば世俗社会から、人間(信者)も財産も奪い取ってくるところに成り立っている。

こうした変則的な出家のあり方のため、二つのことが必然的に帰結する。

第一にオウム教団は、世俗社会と異なるリアリティによって、信者を強力に支配する必要がある。世俗社会には世俗社会のリアリティがあるわけだが、それに巻き込まれていったのでは、出家して全財産を布施するという選択はできない。世俗社会を上回る強烈なリアリティに信者をまきこみ、信者の精神世界を支配する必要がある。それには、信者の修行が進むのをじっくり待つわけにはいかない。

修行の段階を進めるイニシエーションに薬物を用いるのを、ためらわなかったのはそのためだ。

第二にオウム教団は、不断に組織を拡大し続ける(新しい出家者をつぎつぎ見つける)のてない維持できない。出家者が出家すると、その布施で教団は一時的に潤うが、そのあとは逆に、彼の生活の面倒をみなければならず、経済的に重荷になる。それを新しい出家者で埋め合わせるという、ネズミ講とそっくりのメカニズムが、オウム教団に内蔵されている。この自転車操業の構造を、とりあえずうまく回転させたのが、ハルマゲドン予言だったのではないか。

仏教の出家集団が、終末予言(「神教の流れをくむ」)によって教勢の拡大をはかるなんて、木に竹をつないだような感じがする。教理の面でそこをどういう脈絡をつけてあるのかを別稿でのべた(前掲「オウム真理教は、なぜ最終戦争を覚悟したか」)。同じ問題を組織の面で見ると、彼らの出家の観念が特異であることに帰着する。

この質問に、出家者たちは、①上から指示がある、②ただし自分の希望も尊重される、と教えてくれた。なんのことはない、一般企業とまったく同じである。

もしも、一般企業と異なる点があるとしたら、組織の階層秩序(ヒエラルキー)が、修行のヒエラルキーによって決まっていることだろう。

サマナを底辺とし、麻原教祖を頂点とする修行の階梯を、オウムの出家修行者は一段一段のぼっていく。この階梯は十段ほどあるというが、麻原教祖の下・数段は空きとなっており、正大師、正悟師がいまのところ最高ランクであるという。彼ら修行の進んだ幹部たちが、(たとえば正大師の上祐史浩氏が外報部長、という具合に)教団組織を統轄するポジションにつく(編集部註)。その後、六月二十一日の記者会見において教団側は機構改革を発表。宗教的な指導を行なう者と組織の実務運営者とを明確に分離する方針を打ち出した。階級と職務が対応している点は、軍隊に似ているかも知れない。軍隊では、少尉なら小隊長、大佐なら連隊長といった具合に、階級が上の者が組織でも上のポジションを占

ワークと修行

出家主義教団としてのオウム真理教の特徴を、もう少し考えてみよう。

出家者は、家族と連絡を断つ。要するに、教団の与えるリアルティ、教団内でえられる人間関係を唯一至上のものとして選択させられるのである。また、全財産を布施する。要するに、経済的にも教団に依存しながら生きていく以外になくなる(正統仏教の修行者たちは、サンガに依存せず、在家信者に依存して生きていけばよかった。サンガは、布施された土地や家屋など固定資産を所有している場合もあつたが、日々の糧は在家の布施に頼っていた)。

こうして、教団に全面的に依存するしかなくなったオウムの出家者を待っているのが、ワークである。ワークこそ、出家しないといけない修行の方法なのだ。座禅やその他の修行なら、在家のままでもできるかもしれないが、教団のためにフルタイムで奉仕しようとするれば、それは無理である。パソコンの製造や販売、ラーメン・カレー

めることになっており、軍隊においてはそれが逆転することはない。

つぎに大事な点は、出家修行者の修行がどの段階まで進んだかを、誰がどうやって判断するのか? この質問に、私がインタヴューした出家修行者は口を揃えて、「それは麻原尊師がすべて決めます」と教えてくれた。麻原氏は修行者一人ひとりの修行のうえでどの悩みや努力を知っていて、適切なタイミングで修行の段階を先へ進めてくれるのだという。留置所に入れられたあとでも判断が出来るのかと意地悪に聞いてみたが、大丈夫ですという返事だった。

千人を越す出家者全員の修行の進み具合を、麻原氏一人がつぶさに把握できるのか疑問だが、そう信じられていることが重要である。誰がどれだけの修行段階に達したかという修行のヒエラルキーは、麻原教祖が完全に掌握している。ということは、教団組織全体も間接的にコントロールできる、ということである。なにが教団のために必要な活動で、誰がそのために行動すべきか(組織編成と人員配置)を、麻原教祖(だけ)が決定できる立場にある。なぜならそれらは、すべて修行に関する

の飲食店、車の運転、病院での医療活動、薬品の製造……。どこから見ても、世俗の活動(いわゆる労働)だ。これを修行として行なう。既存の宗教で、これによく似たやり方を探せば、修道院かイエズス会。あるいは、禅宗だろうか。

オウム真理教は、自給自足を掲げている。ハルマゲドンで社会が徹底的に破壊されたあと、自分たちだけが生き残るといふのだから、筋は通っている。自給自足を掲げる以上、労働が義務となる。

在家信者や国家財政に負担をかけないように考えた禅宗は、出家者の労働を禁止していた従来の戒律をかなり捨て、労働こそ修行であるとする新しい修行規則(清規)を制定した。自力更生で行かないと、中国では社会的尊敬をえられないのである。禅宗の労働(作務)は、市場経済と関係ない。オウムのワークは、市場経済のただなかで行なわれるが、利潤や採算は一義的である。教団を維持するための活動がすべてワークとみなされるといふ点では、禅宗と似ていると言えよう。

それでは、誰がどのようなワークをするか、どうやって決まるのだろうか?

ことがらだからだ。

共産党とオウム教団

オウム教団の組織は、一般の企業組織(官僚組織)とみかけは似ているが、一人ひとりがそれを修行として行なっている点で、根本的に異なる。このためオウムの組織は、いわゆる近代的な官僚組織と違った動き方を示す。

近代の官僚組織は、一人ひとりが職務に忠実であることが基本である。権限と責任の原則、文書主義、手続き主義、形式合理性……。要するに、法律や規則に従いつつ、個人の感情や意見をさし挟まないで、職務をこなすことが求められる。そして、めいめいがこなすべき職務の内容は、組織の設置目的や職務分担によってあらかじめ決まっている(上司が勝手に変更することはできない)。

レーニンの時代、共産党は非合法の秘密組織だったが、こうした近代の官僚組織のひとつであることに違いなかった。その目的は、革命を実現すること。それに必要な職務分担でもって、組織ができて上がっている。「職務への忠誠」の観念が基本になれば、レーニンが



シークレットワークに教団「幹部」が関与したことは、オウムの修行体系の必然だったのかも知れない

はじめてたいさぶろう 48年神奈川県生まれ。東京大学文学部、同大学院修了。社会学者。東京工業大学教授。著書に「はじめての構造主義」「仏教の言説戦略」など多数。

者につぎの修行のステップを提示することもできないのである。

尊者の権威はどこからくるか?

地下鉄サリン事件の実行犯グループは、治療省トップの林郁夫医師をはじめ、教団幹部がずらりと加わっているというので注目を集めた。松本サリン事件の際も、科学技術省長官の故村井秀夫氏のみならずサリンを噴霧したという。こうした容疑が事実であるとすれば、それは、出家修行者の集団であるというオウム教団の組織原則から必然的に導かれる

ことである。しかもこれらは、すべて教祖麻原氏の指示と承認による、と考えなければならぬ。なぜなら、修行の階梯を設定し、誰がどの段階に達しているかを判断し、秘密の任務を考え出し、修行者たちにそのワークを割り振るのは、麻原氏の宗教的権威がなければできないからである。麻原氏の知らないところで行なわれたなら、それは修行としての意味を持たなくなるのだ。それでは、麻原氏のそうした権威は、仏教のロジックでもって根拠づけられるものなのか? 私は疑問に思う。

オウム真理教の出発点は、南伝パーリ語仏典だった。麻原氏の著作のいくつかも、そうした仏典の解釈である。オウム教団が仏教を名のるなら、その解釈の正しさを主張できなければならぬ。世間の評判では、オウム教団は熱心にパーリ語仏典を研究していて感心だということになっている。青山の東京総本部で私を案内してくれた外報部の担当者は、オウムではパーリ語の文法書も出版していると教えてくれたので、私は興味をもって、どういう研究者が監修しているのか実物をみたくてみると、スリランカで出版されている文法書の、リプリントを日本で出版しただけのことらしい。

いったいオウム教団に、パーリ語や仏教学に通じた学者・研究者が何人いるのか? 教団から出版されているパーリ語経典の翻訳はどうやって進めているのか? わからない部分は、麻原氏の宗教的インスピレーションにもとづいて意味を決定するのだという話も聞いた。これでは、まさに超訳である。ちなみに麻原氏にどれぐらいパーリ語の知識があるのかは、うっかり聞きそびれた。

死のうと、上部が逮捕されようと、共産党員としてのアイデンティティはゆるがない。こうした観念があれば、秘密の任務を実行する場合にも、共産党のなかのある部隊縦割りの官僚組織でもって担当できる。「職務への忠誠」は、およそ近代の官僚組織にとって不可欠の観念なのだ。

オウム教団の場合、一人ひとりの行動の根底にあるのは、修行へのモラル(修行をやるぞ、という気持ち)である。そのモラルがあるところへ、麻原教祖から「これがお前のワークだ」と言われてはじめて、職務とのつながりが生じてくるにすぎない。言いかえるなら、「職務への忠誠」よりも、「麻原教祖への信頼」のほうが優先する。教団の医師や科学者や弁護士が、専門的な「職務への忠誠」よりも、「麻原教祖への信頼」や教団の組織目標を優先させてしまった理由は、ここにある。こうした構造は、教団の強みであると同時に、弱点にもなっている。

(その昔) 共産党は、革命をめざす非法的な組織で、共産党員になることは、既存の資本主義社会と全面的な対決・闘争の関係に入ることを意味した。どんな下っ端の党員であ

っても、階級闘争に一生を捧げる覚悟ができていた。それであれば、「これは党の命令だ」と本人に告げれば、どんな任務にもつかせることができる。つまり、秘密の任務をもった部隊を、党組織のなかに縦割りで作れるわけである。まともな近代の官僚組織であれば、こういうことが可能でなければならぬ。

ところが、オウム教団の場合、秘密の任務(シークレット・ワーク)を、そのように組織することはできなかった。事件は現在、ひき続き捜査中であり、真相は法廷で明らかにされるしかない。警察・検察の非公式の発表しか材料のない我われが、オウムの一連の疑惑を事実であるかのように断定してしまうことは危険だ。ここで考えたのは、地下鉄サリン事件をはじめとする一連の容疑事実が、報道されているように教団幹部を実行犯に巻き込んでいくとすると、それは教団の組織原則から言って十分に説明のつくことなのか、ということである。

オウム教団は、出家修行者の集団である。そのメンバーは、出家する時点で、修行を続ける(そして、何かのワークをする)覚悟まではしたかもしれないが、日本の法律は無視

しますとか、サリンを喜んでば撒きましますか覚悟を決めたわけではない。つまり、オウムの出家修行者は共産党員と違い、単に指令しただけでは、秘密の任務をこなす兵隊として使いたいものにならないのである。

それでは、どうするか。教団には、修行の階梯がある。小乗・大乘・金剛乗と修行の段階が進むに従って、それまで知ることのできなかった知識が少しずつ開け、麻原教祖との距離がますます縮まり、教団の目的がいよいよはつきり理解できるようになる。修行の進んだ人間ほど、社会常識からかけ離れた任務を任せるのに適当であることになる。

密教の末期にインドで現れたタントリズムに、殺生・偷盗・妄語・姦淫など、小乗の戒律が禁じている行為をわざと実行するという修行法があった。殺傷(ポアする)「こと!」が修行になるとは物騒な話だが、修行の段階があがったことを証明するために、低い修行の段階では禁じられていることを実行するというのは、密教の論理にも通じる。したがって、こうした秘密の任務は、高位の修行者に集中せざるを得ない。また、つぎつぎと秘密の任務を考え出していけないと、高位の修行